

## 報 告

インクルーシブ保育における特別な支援を要する  
子どもの活動参加に関する調査報告

—参加可能な遊びに着目して—

栞 千晶<sup>1)</sup>, 橋本 創一<sup>2)</sup>, 秋山千枝子<sup>3)</sup>

## 〔論文要旨〕

本研究では、保育士の加配などの対象ではない、担任保育士が個別に支援・配慮が必要であると感じている子どもを「要支援児」と定義し、公立保育所に勤める保育士760名を対象に、要支援児の遊びや活動参加について質問紙調査を行った。その結果、1クラスに在籍している要支援児の平均人数は、年齢クラスが上がるごとに増加傾向にあり、2歳児クラス以上ではクラスの1~2割を占めていた。また、同じ発達段階の健常児と比べ、支援が必要な遊びがあることや、子どもの特性によって参加可能な遊びに違いがあることが示唆された。インクルーシブ保育において、要支援児の特性に合わせたフォローや遊びの選択を行うことが遊びへの参加を促すことにつながると考えられる。

Key words : インクルーシブ保育, 特別な支援を要する子ども, 遊び, 介助

## I. はじめに

近年、保育所に在籍する障がいのある（疑い含む）子どもの人数は増加傾向にある。日本保育協会が行った、障がい児に限らず通常より手がかかる子どもを含めて支援が必要となる子どもを「遅れのある子ども」と定義して全国の保育所に行った調査では、遅れのある子どもが「現在いる」と回答した施設は65.5%であった<sup>1)</sup>。また、全国保育協議会の調査では、障害者手帳を持つ子どもがいる保育所の割合は全回答数の42.0%、手帳は持っていないが支援が必要と判断される子どもがいる保育所の割合は35.8%、対象とまでは言えないが判断が難しい子どもがいる保育所は24.9%であり、保育現場に配慮を必要とする子どもが増えていく現状が示唆された<sup>2)</sup>。ここから、多くの保育所で、

障がいのある子どもとない子どもを共に保育していることがわかる。橋本らは、このような障がいのある子どもとない子どもが共に交流し、一緒に育ち合う保育をインクルーシブ保育と定義している。また、インクルーシブ保育の意義として、障がいのある子どもにとってもない子どもにとっても交流の機会を通して経験を広めて「社会性や豊かな人間性を育むこと」を挙げている<sup>3)</sup>。

インクルーシブ保育を実施するにあたり、必要な視点の一つとして、障がいのある子どもの「活動・参加」が挙げられる。2001年にWHO総会で出された国際生活機能分類（International Classification of Functioning, Disability and Health : ICF）において、「障害」は「機能障害（構造障害も含む）」だけでなく、「活動制限」、「参加制約」などすべてを含み込む概念である

A Questionnaire Survey of Participation for Children with Support Needs in Inclusive Childcare :  
Focusing on the Participation and Support in Play

〔2773〕

Chiaki MASU, Soichi HASHIMOTO, Chieko AKIYAMA

受付 15. 9.11

採用 16. 8. 6

1) 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科（大学院生）

2) 東京学芸大学教育実践研究支援センター（研究職）

3) あきやま子どもクリニック（医師/小児科）

別刷請求先：栞 千晶 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

Tel/Fax : 042-329-7678

とされている<sup>4)</sup>。橋本らは、心身機能・身体構造へのアプローチは、主として医療であり、心身機能の維持・改善をめざす一方、活動と参加へのアプローチは、学校教育・障がい福祉フィールドにおいて、主として教師や支援者などによる教育・支援であり、活動向上や参加促進をめざすものとしている<sup>5)</sup>。保育士においても同様のことが言える。すなわち、インクルーシブ保育とは、障がいのある子どもも活動できる・参加できる支援や工夫を考え、行っていく保育である。保育における活動で重要なものが「遊び」である。保育所保育指針では、保育士等は、子どもと生活や遊びを共にする中で、一人一人の子どもの心身の状態を把握しながら、その発達の援助を行うことが必要であるとされている。また、子どもは、遊びを通して、仲間との関係を育み、その中で個の成長も促されると述べられている<sup>6)</sup>。障がいのある子どもが参加できる遊びを把握することは、インクルーシブ保育を円滑に行い、対象児の成長を促すために有効であると考えられる。

一方、そのような支援・工夫や参加可能な遊びの把握を行っていくには、保育士側の資質や保育スキルも求められ、経験と知識のある人でないと難しい面も多い。

そこで、本研究では、保育士の加配などの補助事業対象の乳幼児のことを「障がい枠認定児（以下、認定児）」、上記の障がい枠に入っておらず、保育士が個別に支援・配慮がさまざまな面で必要であると感じている子どもを「要支援児」と定義し、保育経験年数の長い保育士が多い公立保育所の保育士760名を対象に質問紙調査を行い、インクルーシブ保育における要支援児の遊びや活動参加について検討することを目的とした。

## II. 方 法

### 1. 調査対象と調査期間

東京都にある公立保育所52園に勤務する760名の保育士を対象に、郵送により質問紙を配布した。なお、障がい児枠の枠組みや加配の基準、障がい児に関する職員研修の回数や質、取り組みなどが自治体によって異なることを考慮し、同一エリアにある保育所を対象に調査した。保育士の質や制度のズレを少なくすることで、子どもの実態把握が明確になると考えたためである。調査期間は2013年6～8月であった。

## 2. 調査内容

### 1) 調査対象者のプロフィール

保育士経験年数、回答者が現在担当しているクラスについて（年齢クラス、クラスの子どもの数、障がい枠認定児数、要支援児数）回答してもらった。

### 2) 担当クラスに在籍する要支援児1名について

回答者の担当クラスに在籍する要支援児1名について、対象児の所属年齢クラス、診断名の有無、1対1での介助員の有無、介助が必要な場面（①朝・帰りの支度（荷物の整理・準備）、②運動、③製作、④表現、⑤自由遊び（屋外）、⑥自由遊び（屋内）、⑦劇や読み聞かせ、⑧給食・おやつ、⑨昼寝、⑩トイレ、⑪その他から当てはまるもの全てを選択）、対象児に一番強くみられる特性とその他にみられる特性（①全般的な発達の遅れ、②言葉の遅れ、③落ち着きのなさ、④コミュニケーションが苦手、⑤こだわり・感覚過敏の強さ、⑥場面・行動の切り替えが苦手、⑦感情コントロールが苦手、⑧乱暴・暴言など、⑨その他から強くみられる特性1つに○、その他の特性に△を付けて選択。その他の特性については複数回答可）、対象児が楽しく参加可能な遊び（①音楽（歌・楽器）、②ダンス・リズム遊び、③ブランコやすべり台などの固定遊具遊び、④受容遊び（動植物、絵本、紙芝居などを見る）、⑤ルール遊び、⑥ごっこ遊び、⑦製作・造形、⑧その他から3つ選択）についてそれぞれ回答してもらった。

## 3. 分析方法

要支援児にみられる特性ごとの参加可能な遊びの傾向について、 $\chi^2$ 検定を用いて、特性の有無と参加可能な遊びの関係を検討した。統計処理にはIBM SPSS Statistics21を使用した。

## 4. 倫理的配慮

調査の依頼文にて、研究の主旨、回答は自由意思であること、得られた情報は研究の目的以外で使用しないこと、個人が特定されない配慮を明記し、調査用紙の回収をもって調査への同意が得られたものとした。

## III. 結 果

質問紙の回収部数は749件で、回収率は96%であった。

### 1. 調査対象者のプロフィール

回答者の平均保育士経験年数は23.7年（SD：8.36）

表1 調査対象者の担当クラスの平均子ども数, 認定児数, 要支援児数

	各クラス 平均人数	認定児		要支援児	
		平均人数	割合	平均人数 (SD)	割合
0歳児クラス	13.4名	0.1名	1.1%	0.4名 (0.81)	2.4%
1歳児クラス	19.5名	0.1名	0.4%	1.7名 (1.45)	6.6%
2歳児クラス	21.6名	0.2名	1.1%	3.3名 (2.33)	13.0%
3歳児クラス	23.5名	0.6名	2.4%	3.8名 (2.33)	15.2%
4歳児クラス	23.6名	0.7名	3.1%	4.9名 (2.44)	18.2%
5歳児クラス	23.9名	0.6名	2.6%	5.7名 (2.75)	22.4%

であった。担当クラスに関する質問の有効回答者数は644名で、回答者の担当クラスは、0歳児クラス:113名, 1歳児クラス:152名, 2歳児クラス:138名, 3歳児クラス:94名, 4歳児クラス:77名, 5歳児クラス:70名であった。各クラスの平均人数, 回答した保育士が担当する認定児・要支援児の平均人数とSD, クラスに在籍する認定児・要支援児の割合を表1に示す。0歳児クラスの平均人数は13.4名, 認定児の平均人数は0.1名, 要支援児の平均人数は0.4名 (SD:0.81), 1歳児クラスの平均人数は19.5名, 認定児の平均人数は0.1名, 要支援児の平均人数は1.7名 (SD:1.45), 2歳児クラスの平均人数は21.6名, 認定児の平均人数は0.2名, 要支援児の平均人数は3.3名 (SD:2.33), 3歳児クラスの平均人数は23.5名, 認定児の平均人数は0.6名, 要支援児の平均人数は3.8名 (SD:2.33), 4歳児クラスの平均人数は23.6名, 認定児の平均人数は0.7名, 要支援児の平均人数は4.9名 (SD:2.44), 5歳児クラスの平均人数は23.9名, 認定児の平均人数は0.6名, 要支援児の平均人数は5.7名 (SD:2.75) であった。

保育士一人あたりが担当する1クラスに在籍している要支援児の平均人数は, 年齢クラスが上がるごとに増加傾向にあり, 2歳児クラス以上はクラスの約1~2割は要支援児であった。回答の中には10人以上要支援児が在籍しているものもあった。回答者の平均保育士経験年数の高さから, 子どものニーズに気がつける保育士が多い可能性も考えられる。今回の調査では, 要支援児について詳しく定義して示していないため, 保育士によって要支援児の程度は異なるが, 保育士が配慮を必要であると感じる子どもの数は著しく多かった。

## 2. 回答者の担当クラスに在籍する要支援児1名について

担当クラスに在籍する要支援児の中で, 最もよく知る子ども1名について以下の質問に回答してもらっ

た。対象児の所属年齢クラスは, 0歳児:33名, 1歳児:90名, 2歳児:128名, 3歳児:97名, 4歳児:81名, 5歳児:81名, 不明:139名であった。

### 1) 診断名の有無と1対1での介助員の有無

対象児の診断名の有無と介助員の有無については, 表2の通りである。この設問の有効回答者数は481名であった。介助員が付いている21名のうち, 診断名があるのは11名, 診断名がないのは10名であった。また, 介助員が付いていない439名のうち, 診断名があるのは24名, 診断名がないのは408名であった。

### 2) 要支援児への介助が必要な場面

有効回答数482件のうち, 介助が必要な場面として最も多かったのは「自由遊び(屋内)」247件, 次いで「自由遊び(屋外)」208件, 「給食・おやつ」190件であった(図)。

### 3) 年齢クラスごとに見た要支援児に一番強くみられる特性

有効回答数は386件, 要支援児の所属クラスは0歳

表2 対象児の診断名の有無と1対1での介助員の有無(名)

		診断名			合計
		ある	ない	その他	
介助員	付いている	11	10	0	21
	付いていない	24	408	7	439
	その他	6	13	2	21
合計		41	431	9	481

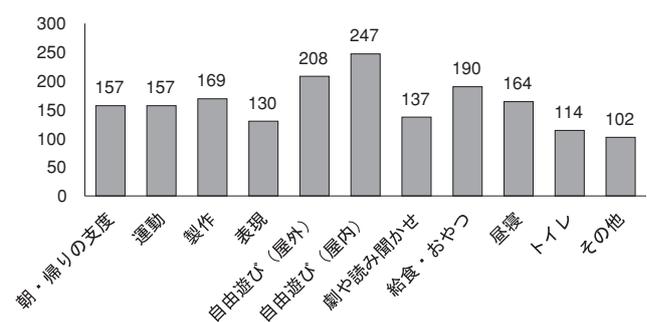


図 要支援児への介助が必要な場面

表3 年齢クラスごとに見た要支援児に一番強くみられる特性の割合

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
全般的な発達の遅れ	36.4%	10.8%	12.4%	21.1%	10.1%	7.1%
言葉の遅れ	0.0%	10.8%	7.9%	15.8%	2.9%	1.8%
落ち着きのなさ	13.6%	33.8%	15.7%	11.8%	23.2%	10.7%
コミュニケーションが苦手	13.6%	9.5%	19.1%	13.2%	17.4%	19.6%
こだわり・感覚過敏の強さ	4.5%	6.8%	18.0%	6.6%	8.7%	5.4%
場面・行動の切り替えが苦手	4.5%	9.5%	10.1%	14.5%	10.1%	19.6%
感情コントロールが苦手	4.5%	2.7%	9.0%	7.9%	15.9%	30.4%
乱暴・暴言など	0.0%	4.1%	1.1%	7.9%	7.2%	5.4%
その他	22.7%	12.2%	6.7%	1.3%	4.3%	0.0%

表4 年齢クラスごとに見た要支援児が楽しく参加可能な遊び

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
音楽（歌・楽器）	39.1%	22.2%	16.9%	12.6%	12.1%	12.0%
ダンス・リズム遊び	17.4%	28.1%	21.9%	24.3%	18.8%	16.3%
固定遊具遊び	0.0%	11.7%	24.1%	22.2%	15.9%	15.3%
受容遊び	4.3%	18.1%	15.0%	13.5%	10.6%	15.8%
ルール遊び	4.3%	0.0%	0.6%	1.7%	8.7%	10.0%
ごっこ遊び	0.0%	5.8%	8.5%	12.6%	9.2%	5.7%
製作・造形	4.3%	4.1%	8.5%	9.1%	17.4%	20.1%
その他	30.4%	9.9%	4.4%	3.9%	7.2%	4.8%

児：22件，1歳児：74件，2歳児：89件，3歳児：76件，4歳児：69件，5歳児：56件であった。年齢クラスごとに見た要支援児に強くみられる特性の割合を表3に示す。

0歳児では、「全般的な発達の遅れ」が36.4%（8件）と最も多かった。1歳児では、「落ち着きのなさ」が33.8%（25件）で最多，2歳児では、「コミュニケーションが苦手」が19.1%（17件），「こだわり・感覚過敏の強さ」が18.0%（16件）を占めていた。3歳児になると，再び「全般的な発達の遅れ」が高くなり，全体の21.1%（16件）を占めていた。4歳児は「落ち着きのなさ」が23.2%（16件），次いで「コミュニケーションが苦手」が17.4%（12件）であった。5歳児では，「感情コントロールが苦手」が30.4%（17件），「場面・行動の切り替えが苦手」，「コミュニケーションが苦手」がそれぞれ19.6%（11件）であった。

4) 年齢クラスごとに見た要支援児が楽しく参加可能な遊び  
有効回答数は456件，対象児の所属クラスは0歳児：15件，1歳児：75件，2歳児：118件，3歳児：93件，4歳児：78件，5歳児：77件であった。要支援児が楽しく参加可能な遊びについて3つ選択してもらい，年齢クラスごとに要支援児が楽しく参加可能な遊びの割合を算出した（表4）。

0歳児は「音楽（歌・楽器）」が39.1%（9件）で最も高く，次いで「その他」が30.4%（7件）であった。「その他」の内容としては，「0歳児なので限定された遊びはない」，「ふれ合い遊び」，「歩いたり，ハイハイをする」などが挙げられていた。1歳児では「ダンス・リズム遊び」が28.1%（48件），次いで「音楽（歌・楽器）」が22.2%（38件），「受容遊び」が18.1%（31件）であった。2歳児は「固定遊具遊び」が24.1%（77件）と最も高く，次いで「ダンス・リズム遊び」が21.9%（54件），「音楽（歌・楽器）」が16.9%（54件）であった。3歳児では，「ダンス・リズム遊び」が24.3%（56件），「固定遊具遊び」が22.2%（51件）で，「受容遊び」が13.5%（31件），「音楽（歌・楽器）」，「ごっこ遊び」がそれぞれ12.6%（29件）であった。4歳児は，「ダンス・リズム遊び」が18.8%（39件），「製作・造形」が17.4%（36件）となっていた。5歳児では，「製作・造形」が20.1%（42件），「ダンス・リズム遊び」が16.3%（34件），「受容遊び」が15.8%（33件），「固定遊具遊び」が15.3%（32件）であった。

5) 要支援児にみられる特性ごとの参加可能な遊びの傾向  
要支援児にみられる特性（複数回答可，一番強くみられる特性とその他の特性の両方を含む）の有無と参加可能な遊びの関係について検討した。その結果，「全般的な発達の遅れ」がある要支援児は「製作・造形」

が有意に低く、「全般的な発達の遅れ」のない要支援児は「製作・造形」が有意に高かった ( $\chi^2(1) = 9.487, p < .01$ )。「言葉の遅れ」のある要支援児は、「固定遊具遊び」が有意に高く ( $\chi^2(1) = 5.236, p < .05$ )、「ごっこ遊び」が「言葉の遅れ」のない要支援児より有意に低かった ( $\chi^2(1) = 4.279, p < .05$ )。「落ち着きのなさ」要支援児は、「固定遊具遊び」が有意に高く ( $\chi^2(1) = 8.492, p < .01$ )、「受容遊び」が有意に低かった ( $\chi^2(1) = 5.873, p < .05$ )。「コミュニケーションが苦手」な要支援児は、「固定遊具遊び」が有意に高かった ( $\chi^2(1) = 6.374, p < .05$ )。「こだわり・感覚過敏の強さ」要支援児は、「受容遊び」が有意に高かった ( $\chi^2(1) = 5.380, p < .05$ )。「場面・行動の切り替えが苦手」な要支援児は、「製作・造形」が有意に高かった ( $\chi^2(1) = 13.984, p < .001$ )。「感情コントロールが苦手」な要支援児は、「固定遊具遊び」 ( $\chi^2(1) = 4.936, p < .05$ )、「ごっこ遊び」 ( $\chi^2(1) = 4.518, p < .05$ )、「製作・造形」 ( $\chi^2(1) = 7.105, p < .01$ ) が有意に高かった。「乱暴・暴言など」がみられる要支援児は、「ルール遊び」 ( $\chi^2(1) = 6.135, p < .05$ )、「製作・造形」 ( $\chi^2(1) = 9.222, p < .01$ ) が有意に高かった。

#### IV. 考 察

本研究では、保育士の判断で「要支援児」を1名選択しているため、対象児の要支援の程度や対象児の範囲は著しく広いことが予測される。それを踏まえたうえで、考察を行う。

##### 1. 診断名の有無と介助員の有無

対象児のうち、診断名のある子どもは35名 (7.8%)、診断名のない子どもは414名 (92.2%) であった。ここから、ほとんどの対象児に診断名は付いていないことがわかる。また、1対1での介助員が付いている子どもは21名 (4.7%)、介助員の付いていない子どもは428名 (95.3%) であり、ほとんどの対象児に介助員が付いていない。クラスによって要支援児の人数は異なるが、要支援児が複数いる場合が多いことがⅢ-2の結果から推測され、保育士には要支援児を含めたクラス運営のスキルや、保育スキルが求められていると考えられる。介助員が付いている子どもは、担任保育士が直接関わる機会が少なく、今回要支援児として挙げられなかった可能性もあると思われる。

また、少数ではあるが、診断名があっても介助員が

付いていない子どもや、診断名がなくても介助員が付いている子どももおり、診断名の有無のみならず、子どもの実態に応じた介助員の活用が求められている。

##### 2. 要支援児への介助が必要な場面

介助が必要な場面として、「自由遊び (屋内外)」が多く挙げられ、要支援児の遊び場面で何らかの介助が必要と感じている保育士が多いことが推測される。

##### 3. 年齢クラスごとに見た要支援児に強くみられる特性

強くみられる特性として、子どもの発達特性によるものと、周囲の子どもたちとの比較によって見えてくる特性があると考えられる。

##### 4. 年齢クラスごとに見た要支援児が楽しく参加可能な遊び

遊びは子どもの年齢によってその内容や相手、時間などが変化していく<sup>7)</sup>。ビューラーは感覚機能の視点から遊びを、①感覚遊び (0～1歳頃)、②運動遊び (1～2歳頃)、③模倣遊び (2～4歳頃)、④構成遊び (4歳頃)、⑤受容遊び (4～6歳頃) の5つに分類した<sup>8)</sup>。

0歳児は歩行前で、感覚遊びが行われる時期である。本研究でも0歳児は「音楽 (歌・楽器)」の割合が最も高く、子どもの感覚を刺激する活動が有効であることがうかがえる。1～2歳児は歩行が開始され、言語獲得や自我が確立される時期である。「固定遊具遊び」は2歳児以降で20%前後の割合を占めていたのは、粗大運動の発達の影響と考えられる。また、模倣遊びの一つである「ごっこ遊び」がみられるのは通常2歳後半以降であるが、今回の調査で、「ごっこ遊び」は3歳児以外ではどの年齢クラスでも10%以下であり、健常児との違いが示唆される。

どの年代でも「ダンス・リズム遊び」の割合は高い一方、「ルール遊び」の割合は低い傾向がみられた。「ダンス・リズム遊び」、「音楽 (歌・楽器)」、「固定遊具遊び」、「製作・造形」は、集団に参加しながらも自分のペースで楽しめる。一方、どの年代でも割合の低かった「ルール遊び」は、通常5～6歳頃に増え始める。「ルール遊び」には、社会性や理解力などさまざまな力が求められるため、フォローが必要な要支援児が多いことが推測される。また、微細運動のおおよその発達として、ゲゼルは「鉄で簡単な線に沿って紙を切る」、「簡単な形を描く」は4歳頃、「図形、文字を複写でき

る」は5歳頃とした<sup>9)</sup>。本研究でも「製作・造形」は4歳児以降で割合が増加し、5歳児では一番参加できる遊びとして選択されており、4歳児以降の「製作・造形」の有効性が考えられる。

以上から、年齢による要支援児の参加可能な遊びは健常児と同様の傾向がある一方で、同じ発達段階の健常児と比べて参加が難しい遊びがあることが示唆される。保育士は発達年齢に応じた遊びを行っていくことに加え、要支援児への保育では本人の特性に応じて苦手な遊びは1対1でフォローするなどの関わりが必要と考える。

#### 5. 要支援児にみられる特性ごとの参加可能な遊びの傾向

本研究では、「言葉の遅れ」のある要支援児、「落ち着きのなさ」要支援児、「コミュニケーションが苦手」な要支援児、「感情コントロールが苦手」な要支援児は、「固定遊具遊び」に参加しやすい傾向が示唆された。「固定遊具遊び」は自分のペースで楽しみ、感覚刺激を感じられることの影響と考えられる。「製作・造形」に参加しやすい可能性が示されたのは「場面・行動の切り替えが苦手」な要支援児、「感情コントロールが苦手」な要支援児、「乱暴・暴言など」がみられる要支援児であった。この背景として、手先を動かすことで刺激を感じられ、注意集中を向けやすいことや、自己表現ができることなどが考えられる。「受容遊び」は「こだわり・感覚過敏の強さ」要支援児、「ごっこ遊び」は「感情コントロールが苦手」な要支援児、「ルール遊び」は「乱暴・暴言など」がみられる要支援児が参加しやすいことが示された。これらの結果からも、子どもの特性によって参加可能な遊びには違いがあることがわかる。要支援児の保育において、本人の特性に合わせたフォローや遊びの選択を行うことが遊びへの参加を促すことにつながると考えられる。

利益相反に関する開示事項はありません。

#### 文 献

- 1) 社会福祉法人日本保育協会. 遅れのある子どもの支援に関する実践調査 報告書. 2010. [http://www.nippo.or.jp/research/pdfs/2009\\_01/2009\\_01.pdf](http://www.nippo.or.jp/research/pdfs/2009_01/2009_01.pdf) (平成27年6月1日アクセス)
- 2) 全国保育協議会. 全国の保育所実態報告書2011. 2012. <http://www.zenhokyo.gr.jp/cyousa/201209>.

pdf (平成27年6月1日アクセス)

- 3) 橋本創一, 渡邊貴裕, 林 安紀子, 他. 知的・発達障害のある子のための「インクルーシブ保育」実践プログラム—遊び活動から就学移行・療育支援まで. 初版. 東京: 福村出版, 2012.
- 4) 本郷一夫. 障害児保育. 初版. 東京: 健帛社, 2008.
- 5) 橋本創一, 熊谷 亮, 大伴 潔, 他. ASIST 学校適応スキルプロフィール: 特別支援教育・教育相談・障害者支援のために: 適応スキル・支援ニーズのアセスメントと支援目標の立案. 初版. 東京: 福村出版, 2014.
- 6) 厚生労働省. 保育所保育指針. 2008.
- 7) 深津時吉, 会津 力, 小杉洋子. 発達心理学—乳幼児期から児童期までの発達の姿をとらえる. 初版. 東京: プレーン出版, 1998.
- 8) カール・ビューラー. 原田 茂訳. 幼児の精神発達. 新版. 東京: 共同出版, 1966.
- 9) AL Gesell, CS Amatruda. H Knobloch, B Pasamanick 編. 新井清三郎訳. 新発達診断学. 初版. 東京: 日本小児医事出版社, 1976.

#### 〔Summary〕

This study describes the participation of children with support needs in play and activity by utilizing information obtained from the questionnaire survey for 760 childcare staff. The results show that the average number of children with support needs has a tendency to increase with a rise in the age. Thirteen to twenty two point four percent of children with support needs belong to the age group of 2~5 years. Several children with support needs require assistance for indoor and outdoor play. Therefore, suitable play activities for children with support needs differ with respect to their characteristics. Childcare staff are required to exhibit characteristics such as innovative ideas to conduct activities and support. Moreover, practical involvement of activity-based children with support needs can facilitate participation in inclusive childcare.

#### 〔Key words〕

inclusive childcare, children with support needs, play, support